

第4章

地域の ESD をサポートする

＜地域ネットワークプロジェクト＞



ESD 地域ミーティング・ステップ2 in 日野

地域ネットワークプロジェクト 年間活動報告

地域ネットワークプロジェクトチーム・リーダー 森 良

ESD は地域で実践されて、はじめて具体化される。ESD-J は多くの地域に ESD の実践が広がっていくことをめざし、政策提言や情報提供などに取り組んでいるが、地域ネットワークプロジェクトチームは「地域(市・町・村／県／ブロック)で ESD 推進のしくみをつくることをサポートする」ことをミッションとし、今年度は以下の活動を実施した。

活動の概要

(1) 地域ミーティングの開催支援：ステップ 1 とステップ 2 の成果

ESD-J ではこの 4 年間、地域ミーティングの開催を促してきている。その目的は、① ESD の理解をはかり、②地域や学校で ESD をどう広げていくかの戦略や方向性を議論すること。従来のステップ 1 については、2006 年度は 8 カ所（高知、千葉・土気、水俣、石川、千葉・松戸、貝塚、大野・垂水、久留米）で開催した（64 ページ）。

これらの地域ミーティングステップ 1 の共通の成果は次のとおりである。

- ・ ESD を広げていくためのキーパーソンや組織を把握することができた。
- ・ 次のステップになにをすべきかを共有することができた。
- ・ ESD-J としては、ステップ 1 の開催を支援することにより、ESD をキーワードに人をつなぐサポートをすることができた。

また、すでにステップ 1 の地域ミーティングを経た地域への支援として、ブロックミーティングの開催や ESD を推進するファシリテーターやコーディネーターなどの人材育成などの地域独自の取組みを支援するためのステップ 2 も行った（80 ページ）。その動きは次のとおりである。

- ・ 関東ブロックでは、はじめてブロック内の各地域の取組みの情報共有と実践交流ができた。
- ・ 北信越ブロックでは、地域での ESD 実践者の発掘、紹介を行うプロジェクトをすすめ、実践者間のネットワークづくりをサポートしている。
- ・ 岡山市京山地区 ESD 推進協議会は、市役所、公民館、学校、自治会が参画していて、ESD コーディネーター養成講座などの人づくりや「お悩み相談円卓会議」などの現場の問題解決のサポートに力を入れている。
- ・ ESD-Hino では、12 月と 1 月に、これまでの市民活動や市民参加・協働の成果と課題を整理するワークショップを行い、3 月には「バトンをつなごう大運動会」を開いて、今後 10 年の持続可能なまちづくりの方向性をだし合った。

ステップ 2 の取組みに共通していることは、これまでの個別の市民活動や学習活動の整理と統合化をすすめること、その内容での行政や企業との新たな協働の模索、そしてそれらをつなぐ人づくりに着手することである。

(2) ○○教育と ESD をつなぐ方法を探る「ESD シナリオづくりプロジェクト」

ESD はこれまでの学習や協働とは別の新しいものではなく、環境教育や人権教育、開発教育など、すでに行われている活動がつながり合い、地域づくりとも関連しながら実践されていくことで実現できるものであると考えられている。しかしながら、具体的にどのようにつながり、どのような教育活動が実践されれば ESD なのか、わかりやすい取組みや道筋が示されていない。その現状を踏まえ、「具体的にどうすればいいのか？」という問いに答えるシナリオづくりを、ESD につながる教育活動に取り組む全国レベルの団体とともに取り組んだ。そのプロセスと成果は、本報告書の特集（2 ページ）を参照いただきたい。

今後の活動の方向性

ここで、地域で ESD を広げていくために必要なことを提示してみたい。

①地域で ESD 推進の目標とプロセスを共有する

2014 年（ESD の 10 年最終年）に地域をどうしていきたいのか、そのためになにをする必要があるのか、それはどこからどう始めたらいいのかを、地域の担い手が共有することが大切である。

今づくりつつあるネットワークやパートナーシップはなにに向けたものなのか、なにをするものなのかを明確にする。

②既存の学習や活動に ESD を溶け込ませるシナリオをつくり、ESD を展開する

2006 年度は多様なテーマ・活動をつなぐシナリオづくりに取り組んだが、2007 年度は具体的な教育活動の現場でこれを検討してみたい。このシナリオは次のことを包括する。

- a. 持続可能な開発（SD）の地域の鍵となる問題がなにかを発見する手法
- b. 実行可能な学習戦略
- c. 学習状況（学校・成人プログラムなど）と地域社会との連携を育成する手法
- d. 地域の知識と文化を統合する手法
- e. SD の原則にもとづき地域が内容を決定できるようなカリキュラム立案プロセス

各ブロックに 1 カ所、学校または公民館を対象として、このようなシナリオをつくってみたい。

③ ESD に取り組む自治体を増やす

自治体がすすめるまちづくりのまん中に持続可能性の柱をすえ（ローカルアジェンダ 21 としての自治体総合計画）、市民や企業の参画・協働によりそれを実現していくことが求められている。

そこに向けて、環境自治体会議や環境自治体コンテストなどに参加している自治体をはじめとした全国の自治体に、ESD に取り組むことを促す。さらには「ESD 推進自治体会議」を設立し、ESD 推進自治体行動計画づくりを広げていきたい。

ESD 地域ミーティング in 高知

日 時：2006 年 7 月 29 日（土）、30 日（日）9：30～14：40

場 所：須崎市民文化会館（高知県須崎市）

開発教育・ESD 実践ワークショップ

主 催：国際理解の風を創る会

共 催：ESD-J、国際協力機構四国支部（JICA 四国）、四万十町自主研「国際理解教育部会」

後 援：高岡地区市町村教育委員会連合会、須崎市教育委員会、四万十町教育委員会

連絡先：国際理解の風を創る会（担当）坂山英治

TEL：0880-22-0102（窪川小） E-mail：eiji_sakayama@kt4.kochinet.ed.jp

参加者：50 名（傾向：学校関係者、学生、JICA 国際協力推進員、NGO 関係者）

- プログラム：
- 1 開会挨拶 坂山英治（国際理解の風を創る会 会長）
 - 2 入門講座「ESD とは？」 竹内よし子（SNN 代表、ESD-J 理事）
 - 3 講演「環境問題を考える」 荒木 真一（環境省中四国地方環境事務所高松事務所長）
 - 4 ディスカッション「私たちにできる持続可能な社会づくり」

■ 内容紹介

ワークショップ I 「開発教育と ESD」

アイスブレイキング「いろいろなじゃんけん」のあと「教育」をキーワードにしたワークショップを行う。背中に「〇〇教育」と書いた紙を貼った者（10 人）がなんと書かれているか、会場の人からのヒントを参考に当てていくワークショップである。開発教育・異文化理解教育・グローバル教育・福祉教育・国際理解教育・遠隔教育・情報教育・環境教育・平和教育・多文化共生教育などの言葉を会場の人と当てていったが、今まで聞いたことはあるが明確な説明ができない言葉もあり、改めて考える機会になった。

今までの〇〇教育と ESD（持続可能な開発のための教育）の違いや共通点の説明を聞き ESD（持続可能な開発のための教育）とはなにか、なにをめざしているのかを会場で共通理解していった。

次にゲイブ・フィリップスクリスさん（えひめグローバルネットワーク）が「エコロジカル・フット・プリント」で参加者がどのぐらい環境に影響を与えているかのワークショップを行った。参加者一人ひとりのだした数値から、改めて自分たちの生活がいかに環境に悪影響を与えているかを実感した。

地域でできる国際協力・持続可能な社会づくりとして、えひめグローバルネットワークの活動の報告がされた

内容：モザンビークで約 30 年間続いた内戦は、それが終わった今でも、銃をはじめとする各種の武器が一般の人たちの手に残されている。その問題を解決すべく、現地の NGO が銃器を自転車などの生活物資と交換する活動（銃鋤プロジェクト）を始めた。そこで、現在えひめグローバルネットワークでは、その活動を支援すべく、交換物資として自転車などをモザンビークへ送る支援プロジェクトを行っている。

四国でも世界に発信できる、地域だからこそできることがあるなど、「持続可能な社会づくり」は一人ひとりの意識と行動によって実現するという竹内さんのメッセージを受け、自分たちにできることを考えた。

ワークショップⅡ 「環境問題を考える」

環境問題の歴史をふりかえり、今の環境問題について考えていった（70年代の公害問題は加害者と被害者が別であったが、現在では地球環境問題として加害者と被害者が一緒になっていることなどを確認する）。

環境問題を考えるときに、①できるだけ多種多様な知識と科学的な根拠をもつこと。②絶対的に正しいものはない。リスクをゼロにするのはムリであり、環境リスクをできるだけ少なくすることが大事など、資料をもとに講話があった。環境問題の認識で小中高教員の認識度が低いのはなぜか、との投げかけがあった。

環境問題に対しての講義のあと自分たちにできることとして意見交換をした。



■今後に向けて

ESDの活動を地域（高知）で展開していくためには、まずネットワークづくりが必要であろう。今回のミーティングには、教員とNGOのメンバーの参加があった。個々とのつながりはできたが、ESDをメインにしたネットワークや組織をつくるまでにはいたらなかった。今後お互いの活動を通じて交流をすすめ、高知でできるESDの活動をすすめていく必要がある。

報告：坂山英治（国際理解の風を創る会・四万十町立窪川小学校）

ESD 地域ミーティング in 土気

日 時：2006 年 10 月 22 日（日） 13：00～16：40

場 所：あすみが丘プラザ集会室（千葉県千葉市緑区）

「千葉県の環境づくり」タウンミーティング ～小山町産廃跡地をどう復元するか

主 催：緑の環・協議会、ESD-J

共 催：千葉県環境生活部

連絡先：緑の環・協議会事務局（担当）星野

TEL：043-294-6885 E-mail：er8m-hsn@asahi-net.or.jp

参加者：49 名

再三ニュースになり話題性の高い「小山町の産廃処分用地跡地の復元」というテーマに関心が集まり、千葉県各地の環境団体や著名な活動家が多数参加し、産廃用地を取得した土地改良区など地元の農業関係者のほか、地域の住民も積極的に参加

プログラム： 1 ESD の理念と目的、活動のポイント 村上千里（ESD-J 事務局長）

2 生物多様性千葉県戦略について 中村俊夫（千葉県中央博物館 副館長）

3 小山町産廃処分場建設計画をめぐる経緯とこれからの課題 緑の環・協議会理事長ほか

4 現地復旧と里山振興の課題（経験交流 発表と討論）

発表者 藤原寿和（残土ネットワークちば代表）井村弘子（同事務局長）

所英亮（桜宮自然公園を作る会会長）

荒尾稔（里山シンポジウム事務局長）

なお、討論に参加した活動家、地域住民は多数あった

※ 開会に先立って小山町産廃処分場計画跡地の見学会を開催、多数が参加した

■ 内容紹介

ESD の理念、目的 地域における活動の考え方など

村上千里氏（ESD-J 事務局長）が「国連持続可能な開発のための 10 年」についてスライド解説をまじえて紹介したあと、地域における活動を根づかせるためには多様な個人や団体（主体）とのネットワークを形成すること、地域の人たちが参加できるしくみとプログラムを提供するコーディネート機能のあり方などについて解説された。

生物多様性ちば県戦略について

中村俊夫氏（千葉県中央博物館副館長）が、千葉県堂本知事の提唱を受けて、千葉県における生物多様性の実態を調査し、その保全と再生戦略について解説。

とくに土気地域は千葉県の分水嶺として豊かな自然が残り、多様な生物の宝庫であり地域住民と自然の共生が重要であると力説された。

小山町産廃処分場建設計画をめぐる経緯と、これからの課題、

本会より、午前中に現地を視察した小山町産廃処分場用地跡地の周辺環境などをスライドにより解説

し、なぜこのような違法な産廃処分場計画が進行したのか、その経緯、さらにはこの土地を地元の土地改良区が国税局の競売に参加して落札したドラマティックなニュースの紹介などを行った。

ついで、産廃用地の直下に広がる谷津田地域の保全運動に取り組み、千葉市とのあいだで谷津田保全協定が締結された成果について発表された。

現地復旧と里山振興の課題

(経験交流 発表と討論)

まず、用地買収を行った板倉・大椎土地改良区小高理事長より、今後復元に向けた課題と要望を発表した。

ついで、残土産廃ネットワークちば代表藤原寿和氏が産廃公害の実態、復元の課題などを豊富な事例をあげて解説し、桜宮自然公園を作る会の所英亮会長は地域の自然を再生し美しい公園をつくるために住民参加のしくみをつくり活動して成果をあげた実例とその成功の秘訣が話された。

これらの事例や情報を踏まえて、小山町の産廃跡地の復元にどう取り組むべきかミーティングに参加した各地の環境団体活動家から、活発な意見と助言があった。



開会に先立って開催された小山町産廃処分場計画跡地の見学会

■今後に向けて（感想）

準備した椅子、資料が足らなくなるほど、多数の環境団体活動家や、地元の人たちが参加して、すばらしい熱気に満ちた会議になった。会議の予定時間を延長することとなり参会者にご迷惑をかけたが、充実した会議になった。

発足して間もない、本会のミーティングにこれだけ多くの人たちが関心をもち、有益な提案や助言をしていただいたことに会員一同大いに感激している。

これからは、いただいた提案や助言をどう生かしていくべきかについて、土地所有者や地域の農家、あすみが丘の住民の声も取り入れて活動をすすめていきたい。

この産廃跡地の復元は、息の長い活動になると思うが、ESDの多面的開発教育の他のテーマについても視野を広げ、地域に根ざしたESDの活動組織をめざしたい。

報告：奥山淳（緑の環・協議会）

ESD 地域ミーティング in 水俣

日 時：2006 年 11 月 26 日（日） 14：00 ～ 17：00

場 所：エコパーク水俣内ナーサリー（熊本県水俣市汐見町）

「住んでいる人が主役」の地域づくり

主 催：熊本県ネイチャーゲーム協会、ESD-J

共 催：ハートリンク水俣

連絡先：熊本県ネイチャーゲーム協会事務局 小里アリサ

TEL&FAX：0966-63-0960 E-mail：ori-msg@sea.plala.or.jp

参加者：20 名（水俣で地域づくり・国際交流・水俣病事件にかかわる人、ネイチャーゲーム関係者など）

プログラム：ESD とは？

地域づくり事例報告（山形県朝日町「エコミュージアム」の展開）

水俣市「村丸ごと生活博物館」で元気な村づくり

ワークショップ

■ 内容紹介

1. ESD とはなにか？

今回の地域ミーティングは、チッソから流された水銀を封じ込めるために浚渫・埋立が行われた水俣湾埋立地（エコパーク水俣）のナーサリーで開催された。このナーサリーを含めたエコパークは、現在、熊本県の指定管理者であるハートリンク水俣が管理しており、水銀汚染による公害防止事業によってできた公園の利活用を、地域住民とともに考えたいという意向をもっていた。会場となったナーサリーは、障害をもった人々が園芸療法を兼ねながら、エコパーク内の花壇のための花づくりを行う場所であり、ハートリンク水俣が ESD 地域ミーティングの趣旨に賛同し共催者となったことで、熊本県から使用許可がおりた。ナーサリーを会場とすることで、参加者にナーサリーの存在とそこでの活動、およびエコパーク水俣がどのような公園としてあるべきかに関心をもってもらうことができた。

地域ミーティングは、主催者の熊本県ネイチャーゲーム協会理事長松本和良のあいさつのあと、ESD-J 副代表の池田満之さんから「ESD」とはなにかを解説していただいた。参加者のほとんどは、ESD について聞いたことがない、知らないという状態であったが、この地域ミーティングの開催によって、ESD への理解が生まれたとっていいだろう。

2. 山形県朝日町と水俣市の地域を元気にする取組み

次に ESD を身近な取組みから理解するために、北と南のまちでそれぞれ地域住民が行政と協働で行っている地域づくりの事例が発表された。

* 西澤信雄さん（朝日町エコミュージアム研究会理事）

大規模林道建設反対運動の経験から、反対だけではなく、自然のすばらしさを感じることを子どもたちとの自然観察活動を通じて行ってきた。その活動のなかで、朝日町にはすばらしい自然や文化があり、さまざまな知恵や技術をもつ人がいることに気づいた。この町の自然や生活文化に誇りをもち、生かしながら楽しく生き生きと暮らせる生活スタイルを確立するためにどうしたらよいかと考えていたら、エコミュージアムに出合った。1989 年に町民有志で研究会をつくり、やがて町の基本構想にとり入れられ、日本最初のエコミュージアムが朝日町に誕生した。

コアセンターとサテライトがあり、地元のサテライトを地元の人が案内している。エコミュージアムとは、その地域の、その人の生き方そのものだといえる。名前がカタカナであっても地域と乖離するものではない。

*天野舞子さん（水俣市企画課元気づくり推進室）

高齢化や小規模多品種の農産物が評価されずに村の元気がなくなっていくことをなんとかしようと、水俣市が2001年度に「元気村づくり条例」を制定。元気な村づくりの3本柱は、風格あるたたずまいづくり・まちと村の交流・3つの経済（貨幣経済、共同する経済、自給自足経済）の調和である。その具体化が「村丸ごと生活博物館」で、地区の自然、産業、生活文化を守り育てる地区を市が指定。集落全体を生活の博物館とみたと、そこに住む人のなかから「生活学芸員」と「生活職人」を認定する。

指定や認定を受けるためには研修が必要で、地元の人がよその人と一緒に地元を調べ、絵地図をつくる。そのことによって「ここにはなにもない」から「あれもある、これもある」と自分の生活の足元をみなおすことになった。

現在、指定地区は3カ所で、指定後には、「今まで気づかなかった村のよさを外の人が教えてくれた」と自分の村に誇りを持ち、荒れた田んぼの草が刈られるなど自分の村の景観を意識し、村が美しくなった。また、訪れた人とのつながりが生まれ、ものづくりがすすんだり、村でできる農産物を生かす加工所ができるなど、どんどん村が元気になってきた。



3. 自分の地域でどうする？ ワークショップ

住民と行政の協働により、地元にある豊かさに気づき、それを磨き、住んでいる人が元気になっていった事例から、次に自分が地域にかかわってやりたい夢をあげ、それを実現するにはなにが必要か、を2グループで話し合った。

団地で住民同士がもっと仲良く暮らしたい、地元の自然のすばらしさを子どもたちに伝えたい、市民ISOの審査にもっと生活者の視点を入れたい、地域のいいものを扱うお店をやりたい、施設の利用者を増やしたい、学校給食を自校式にしてもっと地域の農産物を取り入れたい、などのたくさんの夢・想いが語られた。

次にその夢を実現するのに必要なものはなにかを考え、模造紙とポストイットを使ってグルーピングし、その関係を話し合い、それぞれのグループからの発表を行ったところで終了時間となった。

■今後に向けて

参加者はそれぞれ地域でやりたいことをもち、その現場で悩みももっているという共通点があったため、はじめて会ったとは思えないほど率直な意見と情報の交換が行われた。水俣の住民と県内外の参加者という組合せであったので、それぞれの課題に対して、違う視点からのアドバイスや情報が寄せられ、「参加してよかった」「活動のヒントが得られた」「ESDという中身がはじめてわかった」などの感想が聞かれた。

今回の地域ミーティングで参加者は、水俣病の経験が随所に生かされ、「ここに住んでいて楽しい」「幸せと思える」暮らしをつくっていくための活動に、今後声をかけ合って、協力し合える関係の結びめができたのではないだろうか。

水俣に事務局を置く熊本県ネイチャーゲーム協会としても、ネイチャーゲームという自然への気づきから、人と人との結びつき、地域づくりへのかかわりを模索中である。今回の地域ミーティングは、地元の人々にネイチャーゲームを知っていただくよいきっかけとなった。

熊本県ネイチャーゲーム協会が所属している（社）日本ネイチャーゲーム協会は、「ネイチャーゲーム21世紀ビジョン」で、「自然と共生する持続型地域社会の創造をめざしてネイチャーゲームを推進しよう」ということを方針としている。ネイチャーゲームの原点である「シェアリングネイチャー」の視点を忘れず、同時に「持続可能性」に取り組むことがネイチャーゲームの今後の方向性といえる。今回の地域ミーティングで、持続可能な暮らしのために自然体験学習の可能性を広げる地域での活動の必要性を改めて確認することができた。

報告：小里アリサ（熊本県ネイチャーゲーム協会）

ESD 地域ミーティング in 石川

日 時：2007 年 1 月 20 日（日） 14：00 ～ 17：30

場 所：石川県女性センター大会議室（石川県金沢市三社町）

繋ぐを考えるワークショップ

主 催：持続可能な社会づくりいしかわ（ESD-I）

共 催：ESD-J

後 援：石川県

連絡先：持続可能な社会づくりいしかわ（担当）森江章

TEL：076-240-3246 E-mail：morie@kanazawa-net.ne.jp

参加者：23 名（ESD-J、EPO 中部、ESD 富山、県職員、農政、市役所職員、大学関係者、環境系 NPO 関係者、高校教員、自立支援組織、開発教育支援組織、その他民間企業など）

プログラム：オリエンテーション

基調講演（ESD-J の現状）

事例発表（EPO 中部、ESD 富山、ESD-I での取り組み）

ワークショップ（さまざまな ESD の取り組み）

まとめ

■ 内容紹介

1. 基調講演：ESD-J の現状 村上千里さん（ESD-J）

ESD-J の基本的な考え方と行動指針を述べられた

2. 事例発表

a. EPO 中部の取り組み 新海洋子さん（EPO 中部）

EPO 中部の ESD 事業について以下のように述べられた

イ. 今あるものを繋ぐ→ないものを生みだすために、ネットワーク中部 7 県を管轄

2014 年までの 10 年の行動指針を決めた

ロ. 過去の活動実績について述べられた

ハ. 講座の実施で確認したもの、および感想

b. 富山での取り組み 朝比奈裕子さん（AJA FOUNDATION 代表）

イ. 2002 年 2 月、富山での ESD 的な取り組みについて、どこから始める、なにから始めるかが報告された

ロ. さらにすすんで北信越地域ブロックミーティング（2005 年 12 月）に発展し、次の目標や課題設定がなされた

ハ. 北信越担い手会議の実施 → 北信越ネットワーク 福井 石川 富山 長野 新潟が「雪国」というキーワードでまとまることにしたのである

ニ. 今後の課題

人が集まらない。参加者はいても運営にまわる人が不足。地域でそれぞれ自分の活動を抱えてい

る→当然忙しい、思いはあっても集まらない
ESD に参画できるしかけ、魅力づくりが課題。
ESD 参画者の「持続可能」性が必要。ESD の理念
の大切さはわかって、社会が急激に持続不可能
にすすんでいるという危機感、無力感のなかで、
どうモチベーションを保つか。「経済」の逆行に対
して、合意形成の場をいかにつくっていくかとい
う課題が浮かびあがってきた。



c. 石川での取組み 青海万里子さん（金沢エコくらぶ代表）

- イ. 石川の現状と動きについては、まだ ESD の言葉も伝わっていない
- ロ. 具体的活動事例報告として、金沢エコライフ工房が紹介された

d. 石川県 新広昭さん（環境政策課）

ESD はまだ概念整備の段階。環境教育は浸透してきたが、行政のなかもまだ「なにかね？」の段階であり、縦割行政のなかでのすりあわせのむずかしさもある
具体的なアウトプットができてくれば連携の仕方もできると期待している

e. ワークショップ協働再考 世古一穂さん（ESD-J 理事）

- イ. ESD に関する質問を考える→その質問に、質問を考えた人が答える
→答えは質問者自身がもっている、自分自身の考えを発掘する作業を行ったのである
- ロ. (イ) の作業のアウトカムとして ESD-J、ESD-H（北信越）、ESD-I それぞれへの提言・提案がでた

f. 次回へむけての挨拶 岡本紀雄（のとネットワーク事務局長）

事例報告やワークショップでいただいた提案や、提言を元に具体的活動を推進していきますと述べた

■今後に向けて

残念ながら、当初予定していた参加者 30 名には届かず、ESD に対するイメージや理解についても深淺があるのが気にかかったが、村上さんの基調講演、EPO 中部の新海さん、ESD 富山の朝比奈さん、持続可能な社会づくりいしかわの青海さんの事例報告はみなさんとても熱が入り、ESD に対する少なからずの理解と、現在の持続不可能な社会を変革にすることが非常に重要であると感じたのである。

さらに、後半の世古さんのファシリテートによるワークショップで、参加者それぞれがもつ ESD に対するイメージがあぶりだされ、次につなげるためのワークを行うことができた。ワークショップでは、3 つの関係者に対し提言や提案があり、私ども「持続可能な社会づくりいしかわ」へも多くの意見をいただき、まさに今回のテーマ「繋ぐを考える」にふさわしい結果となったのである。それを参考に今後どのように活動をすすめるかが課題であり、人と人を繋ぐ（ネットワークの構築）、「持続可能な社会づくりいしかわ」が持続可能な組織であるために、それをどのように繋いでいくかを探りたい。

交流会において次回の運営委員会が 2007 年 2 月 11 日と決まった。ようやく石川県で ESD 石川丸の出航の準備が整ったところである。

報告：森江章（持続可能な社会づくりいしかわ 事務局）

ESD 地域ミーティング in 松戸

日 時：2007 年 2 月 11 日 13：30～16：30

場 所：まつど市民活動サポートセンター（千葉県松戸市上矢切）

松戸の NPO ネットワーキング

主 催：NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク（通称：CoCoT）

共 催：ESD-J

連絡先：NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク（通称：CoCoT）（担当）山崎恵

TEL：047-366-8909 E-mail：yamazaki@npo-cocot.com

参加者：22 人 スタッフ側 5 人

（NPO 法人を実際に運営している人 12 人 個人 5 人で、今まで CoCoT やサポートセンターの事業でかかわったことのある団体以外にも、はじめて顔を合わせる NPO も 8 名ほどいた）

プログラム：13：30～ あいさつ 川瀬裕思（CoCoT 代表理事）

前回のワークショップの報告

本日の流れと趣旨 犬塚裕雅（CoCoT 理事）

13：40～ 基調提案 講演者：森 良（ESD-J 理事）

「なぜネットワークをつくる必要があるのか？」

－ SCE (Sustainable Community Empowerment) ～持続可能な地域のためのエンパワメント

13：55～ ワークショップ ファシリテーター（進行）：森良

・自分のネットワーク、欲しいネットワーク

・ネットワークしたくなるきっかけは？

16：00～ グループ発表

16：25～ まとめと CoCoT からの提案 小山 淳子

■ 内容紹介

千葉県松戸市では、昨年パートナーシップ条例案が策定され、市民と行政との新しい協働のかたちが条例化される方向ですすんでいる。一方市民側には、多様な NPO・市民活動団体が存在し、独自の活動を展開しているが、内部で活動が収束する団体や、行政の下請け的 NPO も少なくはない。

そんななか、19 年度から指定管理者として、まつど市民活動サポートセンターの運営を担うことになった（NPO 法人）コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT は、松戸市内の NPO が行政と対等になろうということをおねらいとした「松戸の NPO ネットワーキング」を構想している。

じつは、2006 年 7 月、その第一歩として、ネットワークの可能性を探るワークショップを開催している。そのときの成果としては、①ネットワークを中心として広がる可能性の確認や、②ネットワークとはまず顔を合わせることで、③ネットワーク形成過程を「ゆるやかな連携」や「プロジェクト型」とするなど、NPO によるネットワークの可能性をみいだした。一方、現実としてかかる労力の増加に対する懸念などもあぶりだされた。

今回はその NPO ネットワーク構想の 2 回目のワークショップということで、この流れに ESD 地域ミーティングを組み込むことにより、地域課題解決に取り組む市民活動団体、NPO のみならず、さまざまな主体のネットワークづくりが、持続可能な社会の実現に必要不可欠であることを再認識して、集まった各々が松戸のネットワークの原動力になることを期待するものとして企画した。自分たちが今行っている市民活動が、自己決定力をもつ地域づく

りの一端を担っている、すなわち「持続可能な地域のエンパワーメント（SCE）」につながることを意識し、さらに、それぞれの市民活動団体がネットワークすることで、新しいつながりを生みだし、地域が豊かになっていくプロセスをイメージしてもらうのだ。

当日は、市内のNPOで新しいつながりをもとう！という呼びかけに賛同した15団体、個人3名の計22名が集まった。

まずESD-Jの理事でもある、森良氏にワークショップの話題提供として、ミニ講演をしていただいた。ネットワークの概念は、胞子をイメージするとよい。培養体にちりばめられた胞子が菌糸をのびし、あらゆるところに繋がっていく、どこに上位があるわけではなく、胞子それぞれが主体となる。あるいはハブ。自分から発信して6人の人を介すと世界中の人と知り合いになれるという。ハブをそこここにもつことで、WorldWideなネットワークを形成する。今までの縦割りのトップダウン社会がボトムアップになる。ハブや胞子をイメージしたWEB（蜘蛛の巣）的な関係を創ることで、それぞれが主体となり、自己決定力をもつ市民が増える。そして市民自治社会が構築される。これが持続可能な社会への変遷プロセスになる、というのが基調講演の要旨だ。

もちろん、すでにインターネットの世界では多岐なネットワークが形成され、既存の社会組織概念は崩れつつあるが、どっかり根を生やした、地域に暮らす、つまり地域を構成する私たち一人ひとは、逆に身近な自分の肌や空気を感じるところでのネットワークづくりが案外できていない。価値観をともにする遠い人とはつながりやすくなっていても、身近な地域でのつながりをつくるのがむずかしくなっているのだ。そんなことをこの講演で感じた。

森さんのミニ講演後にワークショップを行う。進行は、CoCoT副代表理事でもあり、当センターのコーディネーターでもある小山淳子さん。アイスブレイクを兼ねた自己紹介では、10代後半から20代が中心となって子どもの社会参画をすすめるNPOや、地域通貨を利用した助け合いNPOから、個人参加のかたでは、フリーの僧侶や、竹笛をつくる人などさまざまなジャンルでユニークな活動がそれぞれの口から話されると、もう止まらない！生き生きと自分の活動を話してくれ、これからのワークショップに期待が高まる。その後、グループに分かれ自分のネットワークと欲しいつながり、そしてつながるためにどんなことが必要かを話し合った。

つながりたいネットワークとしては、地域の町内会から分野別ネットワーク、公益団体、企業や公共施設（行政の担当課）などさまざまな組織的要素から、活動場所や拠点場所、資金、専門的なスキルをもつ人、団体の活動の対象者など、素材的要素があげられた。

問題は、そこにつながるためにはなにが必要かである。数多くのポストイットの集約的意見としては、「人材センター」「つながりを創る力のある人」「情報が誰でも手に入る環境」などであろうか。短い時間のなかで、なかなか具体的なアイデアをみいだすことはむずかしかった。それでもこのわずかな間にお互いのニーズとシーズが合致したところもあり、「つながる」より「つなげる」だねという意見も飛び出す。まさに人やもののつながりは、つなげるしかけが必要なのだと再認識した。

■今後に向けて

さて、今回のワークショップをどう生かしていくか、松戸市内のNPOネットワーキング構築に向けて今後どのようにすすめていくか。現在、まつど市民活動サポートセンター運営委員会の企画で、まつど版サポート資源提供システム構想も平行してキックオフしたばかりである（2007年3月）。この二つの糸を紡いでいって確かなWebにまでどうやってむすんでいくのか、課題は大きい。

報告：山崎恵（NPO法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT）



ESD 地域ミーティング in 貝塚

日 時：2007 年 2 月 18 日（日）13：00～17：00

場 所：貝塚市青少年センター（大阪府貝塚市）

環境学習と国際理解学習と人権学習をつなぐ ESD かいづかプログラムをつくろう！

主 催：ヒューライツ大阪（財団法人アジア・太平洋人権情報センター）、ESD かいづかネットワーク、ESD-J

後 援：貝塚市教育委員会

連絡先：ヒューライツ大阪（担当）前川実

TEL：06-6577-3578 FAX：06-6577-3583 E-mail：mmaegawa@hurights.or.jp

参加者：12 名（各分野のリーダー）

プログラム：趣旨説明 前川実（ESD-J 理事、ヒューライツ大阪上席研究員）

セッション1 かいづかの ESD 資源を検証しよう

第 1 報告 貝塚高校における環境学習・人権学習

東照晃（ESD かいづかネットワーク代表）

第 2 報告 南小学校における環境学習—かわっぱクラブ歩遊伝 近木川伝説 BEST10

寺田知代（貝塚市立南小学校）

第 3 報告 貝塚市における人権学習—貝塚市人研の取組み—

岸田和美（貝塚市人権教育研究会事務局長）

第 4 報告 貝塚における郷土愛をはぐくむ環境学習

橋本夏次（貝塚市自然遊学館嘱託、近木川流域自然大学研究会代表）

セッション2 ワークショップ

多様な貝塚の教育実践をつなぎ、持続可能な地域づくり（SD）を考える

森 良（エコ・コミュニケーションセンター代表、ESD-J 理事）

■内容紹介

第 1 回 ESD かいづか地域ミーティングは、環境学習・国際理解学習・人権学習関係者、企業関係者など 12 名の参加で開会。当日は、泉州国際マラソンが開催中で、自治体や NGO 関係者の多くがその要員となったため、参加が当初見込みを下回ったが、各分野のリーダーに集まってもらうことができた。

まず、定刻の午後 1 時に開会。最初に前川実（ESD-J 理事、ヒューライツ大阪上席研究員）が趣旨説明。続いてセッション 1「かいづかの ESD 資源を検証しよう」を行い、環境教育、平和教育、人権教育などの取組みをふりかえった。

第 1 報告は「貝塚高校における環境学習・人権学習」について ESD かいづかネットワーク代表の東照晃さんが報告。地域に根ざした高校として「フラワーポット」の市内設置活動や近木川清掃活動などの地域活動、生命倫理と人権など理科教育における人権学習の授業について報告された。

第2報告は「貝塚市南小学校における環境学習—かわっぱクラブ歩遊伝 近木川伝説 BEST10」について南小学校の寺田知代さんが報告。貝塚市内の和泉葛城山系のぶな自然林に源流を発し大阪湾に流れ込む、近木川の環境浄化と保全に取り組んだ経過。そして、地域の古老からの聞き取り学習に発展し、近木川市民フォーラムや校区まつりで演劇を上映して発表した経過などを報告。



第3報告は、「貝塚市における人権学習」をテーマに貝塚市人権教育研究会事務局長の岸田和美さんが報告。市内の保育所、幼稚園、小学校、中学校が加盟し、就学前教育部、人権文化の創造と表現部、人権・部落問題学習部、健康教育部、障害児教育部、在日朝鮮人教育・多文化共生教育部、集団づくりと自主活動部、進路保障・学力保障部の8つの部会を毎月1回開催し、夏と冬に全体セミナーを開催して人権教育実践の交流に取り組んでいるようすが報告された。

最後に第4報告として「貝塚における郷土愛をはぐくむ環境学習」をテーマに貝塚市自然遊学館嘱託・近木川流域自然大学研究会代表の橋本夏次さんが報告。先の3つの報告をつらぬくものは、近木川流域の自然を守り、市民参加で環境学習・人権学習をすすめてきた点にあることを強調。今後は近木川流域自然大学のネットワーク、すなわち浜手にある「海の分校」（貝塚市自然遊学館）と葛城山麓「山の分校」（ほの字の里・体験型生涯学習施設）の連携をさらに強め、その中間地点に「川の分校を整備し、地域の住民と一緒にすすめる総合学習をさらに発展させる取組みをすすめていきたいと報告された。

つづいてセッション2のワークショップ「多様な貝塚の教育実践をつなぎ、持続可能な地域づくり（SD）を考える」を森良さん（エコ・コミュニケーションセンター代表、ESD-J 理事）の進行ですすめた。現在の貝塚の課題をだし合い、近未来の持続可能な貝塚市づくりに向けた課題についてグループ討議を行い、2つの提案書をまとめた。

■今後に向けて

今回の第1回ESDかいづか地域ミーティングでは、貝塚市の豊富なESD資源が確認された。貝塚市には、海と川と山の豊かな自然があり、和泉葛城山系のブナ自然林の保全や近木川や津田川の浄化活動、二色浜の海浜保全活動とともに、世界人権宣言貝塚連絡会など地域住民と学校が連携したさまざまな環境学習、平和学習、人権学習が展開されている。これらのESD的課題に取り組んできた組織と人々のネットワーク化と総合化がこれからの課題となっていることが再認識された。

ESD かいづかネットワークでは、第1回の成果をふまえ、今後もさまざまな分野の人々との協同ミーティングの積み重ねにより、ESD 学習プログラム集（教材事例集）の協働編集をめざしたいと願っている。

報告：前川実（ヒューライツ大阪）

ESD 地域ミーティング in 大野・垂水

日 時：2006 年 2 月 25 日（日） 10：00 ～ 17：00

場 所：（午前）旧大野小中学校跡地（大野地区公民館別館）
（午後）垂水市民館（鹿児島県垂水市）

午前 大野：地域丸ごと“ESD 自然学校”大作戦の ESD ってなんだろう？

午後 垂水：猿ヶ城溪谷の開発から始めよう！

商店街を元気にする方法と垂水の観光まちづくり

主 催：鹿児島 ESD 協議会準備会

共 催：ESD-J

後 援：垂水市、鹿児島大学生涯学習教育研究センター、鹿児島大学農学部附属演習林、
日本ネイチャーゲーム協会

連絡先：垂水市 ESD 研究協議会（垂水市企画課気付）

TEL：099-432-1143（葛迫・羽生） E-mail：oonoesd@city.tarumizu.kagoshima.jp

URL：http://www.city.tarumizu.kagoshima.jp/kirara-net/shisetsu/esd/index.htm

参加者：午前 15 名（大野地区の方、公開講座「地域で自然学校をつくろう」参加者、大野 ESD 自然学校
関係者である市職員や大学教員など）

午後 40 名（水之上地区住民（猿ヶ城地元住民）、市商工会関係者、商店街関係者、市職員（総
合計画策定ワーキンググループ）、猿ヶ城開発関係者、大野 ESD 自然学校関係者など）

プログラム：

午前の部

1. 主催者挨拶 井倉洋二（鹿児島 ESD 協議会準備会代表・鹿児島大学農学部助教授）
2. 趣旨説明 小栗有子（鹿児島 ESD 協議会準備会・鹿児島大学生涯学習教育研究センター助教授）
3. ESD ってなんだろう？ 大島順子（ESD-J 理事・琉球大学法文学部観光学科助教授）
4. 沖縄県国頭村の事例紹介 大島順子（同上、NPO 法人国頭村ツーリズム協会顧問）
大城 靖（国頭村役場振興策推進室係長）
山川安雄（NPO 法人国頭ツーリズム協会理事長）
5. 意見交換：大野から発信したい ESD を考えよう（進行：大島順子）
6. まとめ

午後の部

1. 主催者挨拶・趣旨説明 小栗有子
2. 講師自己紹介とアイスブレイク 大島順子
3. 報告と質疑応答：猿ヶ城溪谷の開発計画について
山本忠良（垂水市商工観光課道の駅係長兼商工観光係長）
4. 沖縄県国頭村の事例紹介（報告者は午前の部に同じ）
5. グループワーク：なにを大切にしたい？ 私はなにができる？（進行：大島順子）
6. 今後どうするか？（まとめ）

■ 内容紹介

今回開催した地域ミーティングは、垂水市（人口 19,000 弱）と規模は違うものの同様の農村過疎地域にあって、地域住民の人材養成（ESD）を核に観光まちづくりをすすめている沖縄県国頭村（人口 5,700）との経験交流をお

もな目的とした。垂水市でも 2005 年から ESD を核にした持続可能な地域づくりの模索が始まっているが、まちづくりの核に ESD をおくとはどういうことか。経験交流をとおして自ら抱えている課題への取組み姿勢をみつめなおし、そこから次にどう展開させていけばよいのか一人ひとりがそれぞれに発見する、腑に落ちることができるミーティングとして内容を構成した。

沖縄県国頭村では、地域資源をまずは正しく知る人材育成を地道に積みあげてきた。そのことではじめて地域資源を持続的に保全し、生活を支える収入の道としてツーリズムが築かれる。7 年以上におよぶプロセスについて、教育支援者（研究者）としての立場、行政としての立場、そして、一人の住民から出発し NPO 法人を指導する立場としてそれぞれの経験や大事にしてきたことを語っていただいた。

今回のミーティングでは、対象者も会場も変えて 2 カ所で実施した。午前中は、小中学校の閉校後の問題を抱える 62 世帯 149 人の大野集落で、取組みが始まっている「大野 ESD 自然学校」設立構想をどうすれば地元に根ざした活動として具体化していけるのかをテーマに経験交流した。

その結果、「人材育成」の重要性を痛感した。自然、環境、保全を伝えるのは人であることを再認識し、大野・垂水の振興はたくさんの人を集め有益性だけを求めるのではない。長い視点に立って子孫に伝承していける基盤づくりが必要だと思った（市職員）や、「人づくりの重要性と気づきをもった人たちの集まりが大切だと感じた。参加している人と参加していない人との意識のずれをどううめていくかが問題か（住民）」といった感想が残された。

一方、午後は、垂水市街地に会場を移し、現在進行中の猿ヶ城溪谷の開発計画について異なるステークホルダーが共有し、開発計画を点で終わらせることなく、地域資源の掘り起こしやネットワークの形成を通じた面的な広がりをもたせていくことの意義や方法について共有する場になった。以下、寄せられた感想である。

- * 国頭村での取組みを聞くことにより、どこでも抱える問題は同じであると感じた／長年にわたる活動の積上げが大事であることが理解できた。
- * 地域づくり・人づくりをすすめていくうえでの考え方・方針がよく理解できた／コンセプトの重要さとそれを徹底的に守りきること／経済効率を優先させるのか、自然を守りながら生活するのかの選択のむずかしさを感じた。
- * 日常・行政・民間・ほか実行者の方との接点が少ないので非常によい／多くの意見をいけたことはたいへん参考になった／もっと若い小中学生もまじえた会があってもよいのでは？ 今後もこのような機会をつくってください。
- * 市職員だけで考えてすすめるだけでなく、住民参加によって思いもしなかった発想がでると感じた／市民のかかわりを大切にしなければいけないと感じた。
- * 方向の修正が大事と思った／1 年前に必要なだった！ 猿ヶ城キャンプ場についてはある程度構想ができている状況で、今後生かしていけたらと思った。

■今後に向けて

かけ声の ESD ではなく内実として ESD を実践にしていくには、地域の生きた課題のなかに学びがあり、その内容は日々変化していくものだろうと思う。むずかしいのは、学びの継続性・連続性（学びのサステナビリティ）である。今回積み残したことはたくさんあるが、実践的な学びの場をつくりだしていけるしくみをつくっていくことが今後の課題であろう。

報告：小栗有子（鹿児島 ESD 協議会準備会・鹿児島大学生涯学習教育研究センター助教授）



午前の会場となった旧大野小中学校跡地の炭焼窯の歴史を語る前田さんを囲んで（大野 ESD 自然学校づくりの一場面）

ESD 地域ミーティング in 久留米

日 時：2006 年 2 月 25 日（日） 13：00 ～ 16：40

場 所：六ツ門大学（福岡県久留米市）

地球市民の“縁”会 in くるめ ～環境問題と国際協力とまちづくりの架け“箸”～

主 催：NPO 法人久留米地球市民ボランティアの会

共 催：ESD-J

連絡先：NPO 法人久留米地球市民ボランティアの会（担当：池田真里子）

TEL：090-5027-7771（代表：野嶋） E-mail：kovc2004@hotmail.com

参加者：22 名（教員、久留米市議員、幅広い分野での活動者などがみられた）

プログラム： 1. シンポジウム開会、趣旨説明

2. パネルディスカッション「環境問題と国際協力とまちづくりの架け“箸”」

司会・コーディネーター：池田真里子（NPO 法人久留米地球市民ボランティアの会）

パネリスト： 竹内よし子（ESD-J 副代表理事）

白仁田裕二（居酒屋 鉄丸ぎょうざ「まんまる」社長）

宮崎吉裕（田主丸町 緑の応援団 団長）

吉田茂（久留米市環境部環境政策推進課長）

3. 質疑応答

4. ワークショップ「地球市民の“縁”会 in くるめ」

ファシリテーター：井上 昭子（NPO 法人久留米地球市民ボランティアの会）

5. 交流会

■ 内容紹介

地域の活動から

まずは主催団体の活動紹介、地域ミーティングまでの経緯、開催趣旨を説明。久留米市の国際協力ボランティア育成講座に参加した OB、OG たちが 1995 年に KOVC（現 NPO 法人久留米地球市民ボランティアの会）を立ちあげ、モザンビークやタイへの国際協力活動をととして、日本での問題に取り組む必要性を実感。これまでの持続不可能な社会、大量生産・大量消費の社会をみなおすべく、日々の生活にとっても身近な「マイ箸推進運動」に 2005 年より取り組み始める。その持続可能な社会への変革のためには、異なる機関からの視点や異なる分野での取組みなど、多様な立場の人々と今後の持続可能な社会へのビジョンを共有し、そのつながりを深めていくことの重要性が呼びかけられた。

ESD とは？

ESD-J 副代表理事の竹内氏より ESD の 10 年についてレクチャーいただく。KOVC は、国際協力の活動から地域での学びを得、「マイ箸」がその地域、経済、社会、文化、環境などさまざまな課題にかかわっていることを知るが、ESD とは、その学び、つながりを意識し、体系的に理解するための教育である。「社会」「環境」「経済」に均等に取り組む、社会の問題を感じとる価値観、能力を育てていくことが大切である、

との話をいただく。

各分野での取組み

久留米での持続可能な社会づくりをめざして、まずは現在、地域でどのような取組みが行われているのか紹介いただく。久留米市環境部環境政策推進課長（行政）より、久留米市のごみの現状や減量・リサイクルへの取組みについて説明。今後の課題として、環境教育などをおして市民の意識の向上や、生ごみ減量やレジ袋削減対策など、豊かさ・便利さに慣れたライフスタイルのみなおし、また日々の実践の大切さなどがあげられた。



次に居酒屋「まんまる」社長（企業）より、お店での生ごみを肥料にして土づくりから取り組んでいる完全無農薬「元気野菜」についてや食育活動など、持続可能な生き方、仕事としての取組みを紹介。また、現在は友人が扱っている中国からの割り箸（伐採した分だけ竹を植え、葉漬けにしていない箸）を利用し炭にして再利用しているが、今後マイ箸をとり入れるためにはお客さまにどう提供していくかが課題である、とお話いただいた。

そして、日本で捨てられている割り箸は年間 257 億膳にもなり、その 9 割以上は中国から輸入されているが、田主丸町「緑の応援団」団長より、中国での植林活動について報告。800 年前、中国は北部、万里の長城付近で砂漠化が広がったのは、遠くが見渡せるように植林させなかったためともいわれているが、なるべくしてなったものでなく、人がつくった、緑に戻せる砂漠がある。企業に補助金を募り、それを中学生の旅費に充てるなどして市民と一緒に内モンゴルにて植林活動を行ってきた。しかしその活動をおして、カエルやオタマジャクシが見慣れなくなっていること、つまり“地域での砂漠化”に気づき、地元での環境問題を訴える活動を行うようになった、と報告いただいた。

会場からは、教育現場での取組みの報告や、久留米市役所や地域でのさまざまな取組みが広く市民に伝わっていないことへの指摘などがあつた。

会場からは、教育現場での取組みの報告や、久留米市役所や地域でのさまざまな取組みが広く市民に伝わっていないことへの指摘などがあつた。

ワークショップ

参加者から「行政・市民・企業がもう一步踏み込んでかわる方法」、「情報や人がつながる場」について考えたいと議題があげられ、グループに分かれて話し合う。情報共有の場として市内商店街の空き店舗の利用や、学習会やイベントなどに行政も多く参加してもらい意見共有を図ること、省エネなどできることから始めるライフスタイルのみなおしなど、具体的な提案がだされた。

■今後に向けて

“持続可能な社会”づくりにおいて久留米市での取組みに必要なことは？と考えてみると、異なる立場、機関の人々がビジョンを共有し、すでにあるさまざまな個々の取組みがつながること。そうなってはじめて、個々の取組みの効果がより高まるのではないか、と思う。今回の地域ミーティングは、それに必要なネットワークを育むうえで重要な第一歩となった。

報告：池田真里子（久留米地球市民ボランティアの会）

ESD 地域ミーティング ステップ2 関東ブロック

関東圏持続可能な開発のための教育の10年推進ネットワーク ブロックミーティング

<申請団体>

持続可能な開発のための教育の10年さいたま 担当：長岡素彦

FAX：049-233-0402 E-mail：info-lab@cyber.email.ne.jp

■企画概要

埼玉、栃木、神奈川、千葉の各地でワークショップを開催、2007年3月に関東全域のブロックミーティングを開催する。

■実施目的

ステップ1を実施した陣内（栃木県）、長岡（埼玉県）がESD-Jの地域PT会合などをきっかけに関東圏で広く呼びかけ、関東圏持続可能な開発のための教育の10年推進ネットワーク（KEN）を形成した。

まず、課題として、ESDは持続可能性をキーワードに「社会」「環境」「経済」の3つの領域に均等に取り組むことになっているが、現状では「環境」領域に重点がおかれている、という点があげられよう。

また、ESDは、その概念や方法が多岐にわたるとともに、抽象度が高く、一般的な理解が得られにくい。そのうえ、ESDの実践や教授方法もいまだむずかしく、人々が身体的に理解できる手法をもっていないという課題もある。

今回、ESDの社会領域の促進にあたって広く法律や都市計画、平和などのESD関係者と関東各地での地域の社会福祉を担う市民やNPO、社会福祉法人などと連携を図り、ESDの社会領域テーマである福祉・人権などを軸にESD推進を図るワークショップを行う。さらに、そのシナリオづくりも行い、それらの成果をもって関東圏ブロックミーティングを協働で開催することで、関東でのESDの推進とESDのネットワーク形成の一助とする。

■実施内容

●持続可能な福祉をESDですすめよう！

「持続可能な福祉をESDですすめよう！」は関東各地で、環境教育や開発教育だけではなく、地域の社会福祉を担う市民やNPO、社会福祉法人などとも連携を図り、ESDの社会領域テーマである福祉・人権などを軸にESD推進を図るワークショップ（参加型学習）を行うものである。10月から1月にかけて計4カ所で行った。

(1) 10月21日 ESD ワークショップ「持続可能なまち」

川口市・メディアセブン

（主催：持続可能な開発のための教育の10年さいたま）

参加者が「貧困」や「汚染」などのテーマでグループごとに演劇的手法を用いたESDワークショップで理解や討議をすすめていく。参加者から



持続可能な社会づくりや ESD には、他者といかに良好なコミュニケーションをとることができるかが大切で、身体的、実感的に ESD を理解できる有効な手法として、演劇的ワークショップが重要だ、という感想などを得た。

(2) 12 月 2 日「持続可能な地域福祉とは―青田賢之氏を迎えて」宇都宮市・宇都宮大学

(主催：宇都宮大学 陣内研究室)

グループホーム無量荘ホーム長の青田賢之氏（NPO 法人福聚会）に陣内助教授がその活動をインタビューする。参加者は持続可能な地域福祉のあり方をワークショップを交えて考えた。

(3) 1 月 17 日「人権・環境と ESD 〜演劇的手法を活用したワークショップ〜」相模原市・麻布大学

(主催：麻布大学 村山研究室、ふちのべ塾)

憲法学者で麻布大学の教員の村山史世氏とともに、演劇的ワークショップを用いて環境と人権をテーマに、ESD を考える。

(4) 1 月 28 日「地域がもっと元気になるアイデアを考えるワークショップ―持続可能な開発のための教育（ESD）ちばミーティング」千葉市・蘇我勤労市民プラザ

(主催：ESD ちばミーティング実行委員会)

栗原裕治氏（NPO 法人・千葉まちづくりサポートセンター「BORN CENTER」）の「地域が元気になる要素とは」、林浩二氏（環境教育学会、手をつなぐ会）「ESD ってなに？」を聞いて、参加者が地域がもっと元気になるアイデアを考えるワークショップを実施した。

●関東圏持続可能な開発のための教育の 10 年ブロックミーティング

各地で開いたワークショップの成果のうえに、3 月 10 日、関東圏持続可能な開発のための教育の 10 年ブロックミーティングをさいたま市の With You さいたまで開催した。

まず、関東圏持続可能な開発のための教育の 10 年推進ネットワーク（KEN）代表陣内雄次のあいさつ、ESD-J 理事伊藤通子氏の講演、「国連持続可能な開発のための教育（ESD）の 10 年を現場からすすめる」が行われた。



続いて、関東圏各地、関東・埼玉、栃木、神奈川、千葉、東京、茨城、群馬からの活動報告がなされた。

ESD 実践交流会では、関東圏ブロックビジョン、教育マニフェスト、ESD 学校教育研究会などが提案され、ESD と地域の課題などが討議された。

合間には、日本ハーグ平和アピール平和教育地球キャンペーン浅川和也（KEN、ESD-J 理事）による、平和を考える「ポーボキの物語」なども行われた。

■今後に向けて（感想）

関東ブロックとしては各地域の活動を尊重し、相互にネットワークを形成しながら ESD の推進を行いたい。ブロックミーティングについては、今後多様な人々が主体となって行っていきたいと考えている（決して KEN が毎回主催する必要はないと考えている）。また、今回の発展として学校教育の ESD 推進を支援するプロジェクトなどが始まっている。

報告：長岡素彦（関東圏持続可能な開発のための教育の 10 年推進ネットワーク）

ESD 地域ミーティング ステップ2 岡山市

岡山市京山地区をモデル実践地区とした ESD を推進する仕組みづくりとそのためのコーディネーター養成事業等の実施

<申請団体>

岡山市京山地区 ESD 推進協議会 担当：池田満之

TEL/FAX：：086-253-8302 E-mail：ikd@mxt.mesh.ne.jp

■企画概要

岡山市京山地区をモデル実践地区とした ESD を推進する仕組みづくりとそのためのコーディネーター養成事業等の実施で、具体的には、「京山地区 ESD 推進協議会の仕組みづくり」、「人材育成事業（ESD リーダー養成講座）」、「広域連携を視野に入れた ESD サミットを核にした ESD フェスティバルの開催」、「ESD・環境教育円卓会議（ESD・環境教育お悩み相談室）の広域連携開催」の4事業に取り組んだ。

■実施目的

2003年3月にいち早く地域ミーティングのステップ1に取り組み、多様な主体がESDに目を向ける流れはできたが、地域社会自体を持続可能なものへと変えていくESDの具体的な実践を自らの足元から行っていくことが必要と感じ、その一つの挑戦を、2003年度から岡山市京山地区で試みてきた。3年あまりの地域での取り組みで、地域におけるESDの認知度は高まり、2006年度に地域全体でESDを促進していくための推進協議会を立ちあげる第一段階まではこぎ着けた。ここからこの協議会をどうやって定着させ、地域におけるESDを今後どのようにすすめていくかが大きな課題であることから、ステップ2に取り組んだ。

■実施内容

「推進協議会の仕組みづくり」

- ◇ 2006年7月8日に設立したばかりの推進協議会が、地区のESDを推進する仕組みの核となるように育成する取り組みを、ニュースレターの作成とESDフェスティバルの開催という具体的な取り組みをとおして行った。
- ◇ 協議会には毎回30名前後が参加。
- ◇ 中・高・大の学生と町内会や老人会などの社会人といった幅広い世代が参加している。

「人材育成事業」

- ◇ ESD推進の核となるESDコーディネーターを育成していくことをめざして行った。ESDの基礎知識と他事例の学習、自分たちの地域を題材としたESDの検討などに取り組んだ。
- ◇ 12月7日、17日に開催したリーダー養成講座には、それぞれ25名前後が参加。
- ◇ 中・高・大の学生と町内会や老人会などの社会人といった、幅広い世代が参加している。

「広域連携を視野に入れた ESD サミット・フェスティバルの開催」 開催日：2007 年 2 月 3 日～4 日

- ◇ 環境のみならず、国際理解も含めて、京山地区の持続可能な地域社会づくりのための体験学習や交流の場を設けたフェスティバルを企画・開催した。プログラムの核に、地域全体会議である ESD サミットを位置づけ、地域全体で今後どう ESD をすすめていくかなどについて話し合った。
- ◇ 主なプログラムは、「小中高合同の環境学習発表会」、「みんなで豆まき！（地域伝承）」、「サミットオープニングセレモニー（四季をうたう会と参加者での合唱）」、「この 1 年の活動記録ビデオ上映（映像でふりかえる京山地区の 1 年間の記録上映会）」、「京山地区 ESD サミット（京山地区のこれからの人づくり、地域づくりのための地域全体討論会）」、「分科会 ～見て！ 聞いて！ 体験して！ 私たちの ESD ってこんな活動！」（「京山地域の元気！ 発表会（地域再発見・文化の伝承）」、「インターナショナル・カフェ（トルコほか）」、「ワールド・ハンガー・マップ（おかやま女性国際交流会）によるワークショップ」、「みんなよっといで！ むかし遊びコーナー」、「防災コーナー 起震車や消防車がくるよ！」、「節分のなが〜い巻き寿司づくり（地域伝承）」、「京山の昔と今（地域伝承）」、「中山由美さん講演会『南極から地球がみえる』」など。
- ◇ フェスティバルには、全体で 200 名以上が参加。
- ◇ 地域の小・中・高・大の各学校から町内会・婦人会・老人会や市民のボランティア団体まで多様な主体が参加しており、参加者の世代も小学生から 80 歳代の年配者までにいたる。

「ESD・環境教育円卓会議（ESD・環境教育お悩み相談室）の広域連携開催」 開催日：2007 年 2 月 14 日（110 ページ）

- ◇ 日ごろ、直接聞く機会がない環境省や文部科学省の本省の ESD・環境教育担当者から、国はこれからなにをしようとしていて、そこでは地方へなにを期待しているのかなどを伺うとともに、私たち地方の考えを伝えて、国と地方がうまく連携して ESD・環境教育を促進していけるようにするためのコミュニケーションの場として開催した。また、ESD・環境教育を実践している人たちが、日ごろ、悩み困っていることについて、知恵をだし合い、みんなで解決する場とした。



- ◇ 主なプログラムは、「国の方向性と地方に期待することの説明と質疑」「ESD・環境教育促進のための話合い & お悩み相談」「総括スピーチ & メッセージ（ゲストや参加者からのメッセージ）」など。
- ◇ 会議には、約 100 名が参加。
- ◇ 中国四国地方を中心に関東や近畿からの遠方の参加者もあった。所属も学校関係、行政関係、マスコミ関係、NGO・NPO、地域コミュニティ団体、企業・経済団体、国会議員や県議会議員、一般市民など幅広い。年代も小学生から 80 歳代の高齢者まで幅広い。

■今後に向けて（感想）

連携の幅や組織と活動が大きく広がるほど、関係しているところとの調整作業などが増大し、核となる人や事務局の負担がかなりきつくなっている。ESD に取り組むことで、それにかかわる人たちが元気になってほしいのに、逆に核になる人は疲労衰退していくようである。これを打破するため、核となる事務局とコーディネーターが、それを本職として専任できるだけの地域での受け皿（社会的地位と所得確保）ができる社会制度や仕組みを確立させたい。

報告：池田満之（岡山市京山地区 ESD 推進協議会・岡山ユネスコ協会）

ESD 地域ミーティング ステップ2 日野

ワークショップ & バトンをつなごう大運動会

<申請団体>

ESD-Hino 担当：久須美則子

TEL：042-584-8926 FAX：042-589-7212 E-mail：hnk_kusumi1980@yahoo.co.jp

■企画概要

環境と共生を軸に市民と行政と事業者が協働で、環境やまちづくり、地域福祉などに取り組んできた日野市で、これまでの取組みをさらに広げるために、「持続可能性」をキーワードに市民が集い、課題を整理し、今後の展開に向けてワークショップとシンポジウムを開催した。

■実施目的

ESD-J の要請で受け入れ事業として実施した、Asia Good ESD Practice Project (AGEPP) 第一回合同会合（145 ページ）と、ACCU プラネット事業「評価・推進会議」視察の受入れの経験をとおして、ESD-Hino は発足後間がないにもかかわらず、活動の目的や方向性を次第に明確にしていくことができた。その目的を遂行するために、今こそ、広汎な参加の枠組みをつくりたい。そのために一人ひとりの思いをだし合い、それを形にしていくのが参加型ワークショップとポスターセッション＝運動会の開催である。

■実施内容

1. ワークショップ 課題の洗いだしと方向性の確認①（2006 年 12 月）

私たちはどこにいるか？～ESD-Hino にかかわる市民とともに～

「タイムライン」によるふりかえり。過去 10 年を各参加者がふりかえり、成果と課題を確認。課題解決に必要なことは、「活動の連携」と「担う人づくり」であることが結論としてだされた（参加者 15 名）。

2. ワークショップ 課題の洗いだしと方向性の確認②（2007 年 1 月）

私たちはどこをめざすか？～ESD-Hino にかかわる市民とともに～

ワークショップ①で示された課題をふまえながら、今後 10 年持続可能なまちづくりの具体案をだし合った。

環境、福祉、教育などテーマに沿って中期、短期の目標と具体策をまとめた（参加者 15 名）。

3. シンポジウム

「バトンをつなごう大運動会 日野の将来の夢をみんなでワイワイしゃべろう！考えよう！そしてできることから始めよう！」

日時：2007 年 3 月 25 日 13：30～17：00 場所：日野市勤労・青年会館 参加者：30 名

▼超長いタイトルに込める思い

「バトンをつなごう大運動会 日野の将来の夢をみんなでワイワイしゃべろう！考えよう！そしてできることから始めよう！」。これが、ESD-Hino が行った企画の表題である。この極めて長いタイトルにわれわれ ESD-Hino のメンバーの「思い」が込められている。

ESD を地域に広げるうえで必要な前段の取組みとして、2 回にわたるワークショップで日野における市民、行政の

協働の取組みをふりかえり、今後の課題を明らかにした。そこでの結論は、①市民・事業者・行政の協働をどれだけ多くの参加で行えるのか。②そのために必要な具体的な参加のしかけをつくる必要がある。③上記を満たす条件は、主体的な参加者をつくりだす。できるだけ平易な取組みにより、多くの参加と理解の広がりが持続可能なまちづくりの必須事項である。

▼運動会のプログラム

3月25日、夜来の雨が上がり、まずまずの運動会日和。日野市 勤労・青年会館に『大運動会』の参加者が集まった。運動会といっても、今日のプログラムには、パン食い競争も徒競走もない。あるのは『次世代に夢をつなぐバトンリレー』である。この日の特別参加枠には、遠く大阪は「ESD 先進自治体豊中」より、財団法人とよなか国際交流協会の榎井緑さんをはじめ5人の参加を得た。

▼先進事例に学ぶ・つながる・元気をもらう

一同、財団法人とよなか国際交流協会の榎井緑さんの事例紹介に釘づけ。元気のもとをいただいた。

国際交流と環境。異なるジャンルをつなぎながら、暮らしている人の力を上手に引きだし、ニーズに応える豊中市の取組みに、会場の参加者はうなずき、感嘆、まねしてみようのリアクション。活動の場所はちがっても、抱えている問題や悩みは共通しているし、めざすところは一緒であることを再確認できた榎井さんのメッセージである。

わがまちの環境、福祉、国際交流、男女共同参画の各分野をつなぐヒントをたっぷりいただいた。

▼みんなでワイワイしゃべる！考える！参加する！

参加者一人ひとりが考える「10年後の日野のまち像」、そのためにできることを具体的にだし合うワークショップを5つのグループに分かれて行った。進行役は、ESD-J 理事の森良さんと ESD-Hino の有馬さん、尾崎さん、酒井さん、佐藤さん、中川さんの5人のファシリテーターである。

簡単なアイスブレイクのあと、10年後どんなまちでありたいか、そのためにできることはなにかをだし合い、共通するテーマごとにグループを編成し、具体的なアイデアをだし合った。豊かな自然を残したい、地域で助け合って暮らしたい、安心して暮らせる地域をつくりたい、十人十色のビジョンとアイデアがまじり合い、いくつもの『未来につながる種』が、10年後をめざして一緒にやっいてこう！とスタートラインに並んだ。



■今後に向けて（感想）

▼ESD-Hino のこれから

ワークショップでだされた具体案を一つずつ実行に移すことが、これから ESD-Hinoで行っていくことだ。

10年を描き、すぐできること、時間のかかること、手間のかかること、人手のいること、と整理しながらやっいてこう！大運動会の感動覚めやらぬ今の思いを大事にしながら、私たちは確実に新しい歩をすすめている。

ESD を主要事業に位置づけた日野市との協働が始まろうとしている。硬軟おりまぜた ESD-Hino の今後、乞う！ご期待の心意気である。

▼おまけーまち自慢発見のチャンス～今からはじめる参加型企画第1弾

ESD-Hino の活動を紹介しようと作成販売する『残したい日野の風景』を初お披露目。田んぼや、畑、浅川の水辺、日野の原風景を訪ねて歩く『絵葉書ツアー』を企画、広く参加を呼びかけた。葉桜を愛で、たんぼぼ畑に、カワセミとの出会いに期待を込めてまち歩きを楽しもう。

報告：久須美則子（ESD-Hino 代表）

ESD 地域ミーティング ステップ2 北信越ブロック

ESD — ハッピースマイル 100 人発掘事業

<申請団体>

「持続可能な開発のための教育の 10 年」北信越ネットワーク 担当：伊藤通子

TEL：076-493-5409 FAX：076-493-5466 E-mail：ito@toyama-nct.ac.jp

■企画概要

実践者間のネットワーク構築を目的とした、北信越（福井、石川、富山、長野、新潟）の ESD 実践者を発掘、地域および人物をウェブで紹介するプロジェクト。将来は、ESD スタディツアーやミーティングなどにつなげる予定である。

■実施目的

北信越地域では ESD の認知度は都市部に比べて低く、情報提供も不十分であり、これでは、ESD の 10 年が地域住民から乖離してしまうという問題点があった。

そこで、「ESD - ハッピースマイル 100 人発掘事業」として地域内の ESD 活動事例を調査し、ESD の 10 年を推進する個人や団体同士で顔の見える関係をつくることで、ESD の気運を盛りあげ、運動の賛同者を増やすことをねらった。

またその調査の成果より、将来的には、地域の「ESD ガイドマップ」の作成や ESD 情報交換ミーティングへと発展させるために、第一歩として ESD スタディツアーの試行版を行った。

■実施内容

(1) ESD — ハッピースマイル 100 人発掘事業

○日程：平成 18 年 9 月～平成 19 年 3 月

○趣旨：「ハッピースマイル 100 人」という名のとおり、持続可能な社会づくりのための学びの場を地域のなかで提供している元気で素敵な人の笑顔を、幅広い分野の人に届くよう Web 上で公開することにより、まだ認知度が高いとはいえない ESD の 10 年を広く普及し、賛同者を増やすことができる。また、その作成の過程で ESD の実践者や地域を発掘し、その活動にスポットライトをあてる。そうすることで、持続可能な開発に向けた教育活動や地域づくりの実践事例を、目にみえる形にして提供することができ、同様の取組みが各地で行われるきっかけとなる。

○内容：

北信越ブロック（福井、石川、富山、長野、新潟）よりスタッフが集まり、事業に関する企画のための会議を行った。事業の方針を固めた後、主に富山県のメンバーが中心となり、本事業で調査する団体や人を約 30 名選出した。

そのなかから、主に新潟県のメンバーが中心となって、新潟県中越地震の被災地である旧山古志村で復興にかかわるさまざまな人々取材し、そこに存在する ESD に向けての取組みを調査した（関連記事 138 ページ）。

《取材した方々》

山古志梶金

- ・ 関正史さん（肉牛・闘牛飼育農家、長岡市議会議員）：震災により大切な牛を多数失うと同時に、自身も脳出血で倒れたが、奇跡的に復帰。先だって、闘牛サミットの副実行委員長をつとめる。「失ったものは多いけど、同じくらいに得たものも多いと、近ごろようやくそう思えるようになってきたがて。家族の絆とか、集落の人たちとの助け合いの気持ち、全国からの人の情け、山古志のすばらしさの再認識など両手にあまるくらい」。



関正史さん

山古志虫亀

- ・ 田中仁さん（山古志地域委員）：山古志の地域力を再び高めるために、一番熱い話をしてくれる。今年は、これからの復興の活力をつけるために虫亀で夏祭りを実施。
- ・ 斉藤さん（養鯉業 新太郎）

山古志竹沢

- ・ 星野勇さん（竹沢 星野材木店）：「全国への恩返しは、山古志にきて楽しんでもらうこと」。自分の庭につくった桧風呂の温泉に全国の方を招待している。
- ・ 関まゆみさん（山古志サンフラワー）：「復興といわれてもピンとこない。仮設住宅での暮らしを少しでも楽しくするためにヒマワリを植えています」。



小川茂さん

山古志池谷

- ・ 青木幸七さん（池谷区長）：「地域の絆とみんなの心のよりどころづくり」来年の帰村すら難しい池谷集落。みんなが池谷に気持ちをもち続けるためになにができるか？
- ・ 川上巖さん（山古志ふぁん倶楽部、よしたー山古志）：山古志を発信しつづける「山古志ふぁん倶楽部」

山古志小松倉

- ・ 小川晴司さん・増田よねたかさん：中山隧道の記録映画「掘るまいか」などに出演している方々。口も達者で「掘るまいか」のことを話すと止まらない。

大久保集落

- ・ 五十嵐まつおさん（ホンモロコの養殖）：ホンモロコの養殖によって山古志の新しい生業をつくりだそうと取り組んでいる。

種芋原

- ・ 小川茂さん（よしたー山古志代表）：ヤーコンの栽培によって山古志の新しい生業をつくりだそうと、幅広く活動している。

山古志復興推進室

- ・ 斉藤隆さん（山古志復興推進室室長）



山古志復興推進室にて

(2) 2006 ESD-H スタディーツアー

「山古志に日本の明日を探しに（新潟県中越地震2周年復興祈念）」

○ 日程：11月25日（土）13：30～26日（日）13：30（1泊2日）

○ 趣旨：ESD-H活動方針より、2006-2007年に重点的に取り組む活動の一つとして

「もともと地域にあるESD的な活動（地域の宝）をクローズアップする」「ESD的な活動をしているモデル地域の宣伝、紹介、体験学習をすすめる」「実質的に協働するネットワークをつくる」などを掲げている。

その一貫として、ESD-Hスタディーツアー「山古志に日本の明日を探しに」を企画、第一回（試行版）として行った。

今年、震災2周年を迎えた山里“山古志”は、全村離村という過酷な試練を乗り越え、ようやく村民が本格的に戻りはじめている。“山古志”には棚田などの自然風土や、牛の角突き、錦鯉の生産など固有の文化が存在し、また、手掘りの“中山隧道”にみられる不屈の精神やコミュニティの絆、地域の自治など、中山間地の持続可能性へのこれからのヒントになりうる精神土壌が育っていた。これも“山古志”の特性である。

そこで、地域の持続可能性や中山間地の未来、ひいては日本の明日を考えるとき、山古志にこそ新たな気づきと学び、そしてエンパワーメントの鍵がある。そんな思いで、今回のスタディーツアーを行った。

○ 内容：

11月25日

- 1) 山古志復興全体像の話（山古志会館にて）齊藤隆さん（山古志復興推進室室長）より資料とともに山古志の歴史、地震の被害、また復興に向けての困難な点など詳しくお話いただいた。
- 2) 中山隧道見学（中山隧道入り口にて）……増田よねたかさんより隧道掘削時の話を伺った。
- 3) 池谷闘牛場見学（池谷闘牛場にて）……関正史さんより中越地震の被害、復興状況を説明していただいた。宿へ移動する道中にも水没した家屋とともに新しく開通した橋の見学をした。
- 4) 民宿「山古志」へ……長島サキさんより山古志への想いをたっぷり聞き、地物を使った手料理をおいしくいただいた。

11月26日

- 1) なりわいづくり「やーこん」のはなし（種芋原 小川さん宅にて）……小川茂さんより復興にあたっての心意気や、ヤーコン栽培の可能性を聞いた。実際に「やーこん」をいただいた。
- 2) なりわいづくり「ほんもろこ」のはなし（大久保集落）……五十嵐まつおさんより地震当日、被害の状況をきき、ホンモロコ養殖の状況について話を聞いた。
- 3) 錦鯉養殖について（虫亀 新太郎の齊藤さん）
- 4) 昼食（虫亀闘牛場）……民宿「山古志」のサキさんがにぎってくれたおにぎりをいただいた。



震災の爪あと



中山隧道の歴史と誇りを聞く



養鯉業も復活を



長島サキさんの民宿にて

○参加者の感想より一部抜粋：

- ・ すばらしいお天気のなかで山古志を訪れることができ、よかった。
- ・ 民宿の長島サキさんが71歳にしてみてもった夢を語ってくださったり、虫亀の牛の角突き場の神社の上で慰霊碑を修復していた60歳くらいの方が、身の上話とともに夢を語ってくださったことに感動した。
- ・ 健康野菜ヤーコンで特産品開発をめざす“よし一山古志”の取組みなど地場産業の活性化への事例をみることができた。
- ・ 中山隧道の増田さんを初め、山古志の人たちは話したいことが、心にたくさんあると感じた（自分を語れない人が多い現代社会のなかで）。
- ・ 山古志がまだまだ、安心して住める状態にはなっていなかったこと。
- ・ 土木工事の跡が、山古志でみられたはずの日本の原風景を味気ないものになっていること。時間が経って馴染むには、何年かかるのだろうか。

■今後に向けて（感想）

- ・ スタディーツアーをアレンジしてくれた中越復興市民会議などのご苦労に、参加人数で答えられず残念だった。
- ・ 地域は「人」だとあらためて感じ、「人」をつくる学びの場や機会の必要性を再認識した。
- ・ スタディーツアーは、「場」の力と、「人」との関係性やつながりのなかで学ぶことが大切で、そういう学びのスタイルこそがESDだと思った。
- ・ 次回は、企画の立て方や、広報を、もっと戦略的に、世話人が疲れないようにしないと、長続きしないと反省した。改善の余地はたくさんあることがわかった。記録映画の上映などとセットにして、次へつなげたい。

報告：伊藤通子（「持続可能な開発のための教育の10年」北信越ネットワーク）



ESD-J 全国ミーティング 2006

『未来をつくる教育』をつくる



今年度も恒例の ESD-J 全国ミーティング 2006『『未来をつくる教育』をつくる』が開かれた。地域の取組みや、ESD につながる教育 NPO の取組みを学び合い、ESD の今後を探ることが目的。27 の団体会員がポスターセッションにブース出展し、全国から 130 名の参加者が集い、交流の輪を広げた。

←多くの参加者でにぎわうミーティング会場

日 時： 2007 年 3 月 18 日（日）10：00～17：00
場 所： JICA 国際総合研修所 国際会議場（東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5）
参 加 費： ESD-J 会員 1,500 円、非会員 2,000 円（ランチ交流会費含む）
定 員： 150 名 ＊託児あり
参加対象： ESD-J 会員、ESD 関係者（行政、企業、教育関係者等）、ESD に関心のある人

主 催： NPO 法人 持続可能な開発のための教育の 10 年推進会議（ESD-J）

< プログラム >

10：00 開会あいさつ／ESD-J 活動報告

10：20～ 全体会 1 「〇〇教育と ESD をつなぐ」 ●

パネリスト： < 食育教育 > 清水悟 （社）農山漁村文化協会
< 環境教育 > 志村智子 （財）日本自然保護協会
< 人権教育 > 前川実 （財）アジア・太平洋人権情報センター
< 青少年育成 > 吉村敏 （財）ボーイスカウト日本連盟

コーディネーター： 村上千里 ESD-J

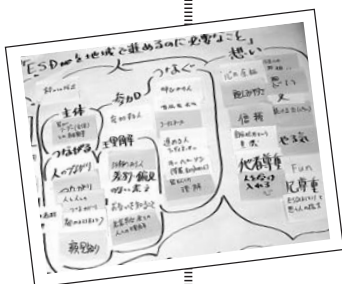
11：45～ ランチ交流会 & ポスターセッション ●

13：45～ 全体会 2 地域の ESD の動きを知ろう

環境省 ESD 促進事業の紹介
地域の ESD を推進する「ブロックビジョン」の紹介

14：30～ 分科会 ESD のこれからを展望しよう ●

- ① 地域の ESD を推進する「ブロックビジョン」をつくろう
森良 NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター
- ③ ESD 国際ネットワーク Cafe
大島順子 （社）日本ネイチャーゲーム協会
- ③ ESD を推進する政策対話
池田満之 岡山ユネスコ協会
- ④ ESD 入門
重政子 NPO 法人 自然体験活動推進協議会





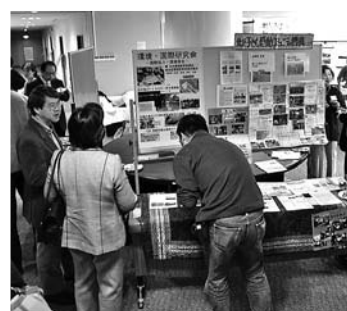
ESD シナリオづくりプロジェクト（2 ページ）の参加者がパネラーとなり、自らの活動を語るとともに、他分野の人との共同作業（ワークショップ）をふりかえっての意見・感想を述べ合った



各出展団体から ESD への思いを発表した



ランチ交流会



ポスターセッション：各地・各団体の活動紹介と相互交流の場になった



分科会①

地域の ESD を推進する「ブロックビジョン」をつくらう
ESD を地域で推進するための課題と戦略を、地域、広域ブロック、全国、それぞれの層で検討した



分科会②

ESD 国際ネットワーク cafe
文部科学省、国連大学、国際 NGO などの ESD 担当者をゲストとして招き、ESD の国際的な同行について意見を交換した



分科会③

ESD を推進する政策対話
ESD の多岐にわたる関連省庁の担当者をゲストに迎え、連携・協働の可能性などについて議論した



分科会④

ESD 入門
ESD 超初心者向けに、自分自身をふりかえり、自分の住む身近な地域を出発点にした ESD 的な学び方をワークショップで楽しく試行してみた

参加者アンケートより

▼感想

- 自分たちの考えをまとめるのによかった
- 各ポスターセッションの人々の発表がよかった
- 全国ミーティングの持ち方について、もっと参加者が参加し、全国の活動が交流できるやり方を工夫すべき
- とても有意義でした、とくに地方からなので、省庁の方の話を聞けてよかった
- 人と人をつなぐきっかけとしてとても役立つものだと思います
- 一つひとつの団体の活動は理解できる、その善意もわかる。にもかかわらず、ESD としてみえてこないのはどうしてでしょう？
- 他団体での活動を自分の団体にとり入れたり、他団体と協力し合ってより広い視野をもって ESD に取り組んでいきたい
- さまざまな分野の方が ESD を中心として活動しているのがよくわかり参考になった。自分の活動のアイデアの素になるものもいくつかありました
- これからの ESD 活動のモチベーションにつながった
- 分科会のアウトプットがなんだったかをもう少しはっきりさせてほしかった。けれども話自体は興味深く、参加できてよかった
- ESD について新しい気づきがたくさんあった。ESD での会の意義に気づくことができました。ESD 元年という感じ
- これからなにをしていけばよいのかイメージがわいてきました。参加してよかったです

▼ ESD-J に期待

- 地方自治体に対する広報、働きかけを強めてほしい
- 企業とのネットワークにも力を入れていただきたい
- 地域との連携の深まりを望みます
- ESD に対する理解を深めるワークショップを紹介してほしい
- ESD-J 全体の助け合い
- 具体的な実践方法の紹介
- お互いの活動内容をシェアできるよう、このような場を設けてほしい
- もっといろいろな団体、学校、地域へ ESD について理解を深める運動
- 各プロジェクトチームの WEB での情報発信
- ESD の推進に必要な環境整備とともに、ESD 推進を阻害している社会的状況に着目して活動を展開してほしい

